

1 はじめに

本年度は、本主題による研究の3年次である。岡崎市現職教育社会科部では、1年次は「遠くて近い国、マレーシア」(1年地理的分野)、2年次は「共生社会に生きる」(3年公民的分野)で研究実践を積み重ねてきた。この2年間の実践では、個人追究を核とした話し合い活動を展開することで、事実が多面的にとらえられるようになり、学ぶ喜びが分かち合えるようになることが明らかになった。また、社会事象に関わる人々を主体的に追究いくことで、共生のあり方を考えることができるようになることが分かった。

そこで、本年度は、これまでの実践の成果を踏まえながら、歴史的分野に視点をあて、どのようにすれば歴史学習において「共生のあり方を問う」ことができるかを検討していきたいと考えた。

2 研究の基本的な考え方

(1)「学ぶ喜びを分かち合う」について

「学ぶ喜び」は、生徒が問題意識をもって、問題解決に向けて追究し、解決が図られたときに得られるものであると考える。そして「学ぶ喜びを分かち合う」ことは、個々の学びの充実を図るだけでなく、学びの共有化を進めていったときに実現できるであろう。そのために、個人追究を通して確かな足場を築き、個人追究で分かったことを主張し合うことで生徒同士の関わりを深め、学ぶ喜びを分かち合えるようにしていきたい。

(2)「共生のあり方を問う」について

「共生」を考える場合には、まず自分の生き方を考えた上で、「自分と家族、友達、地域社会、他民族、自然など」との関わりを考えていく必要がある。そして、様々な価値葛藤の場面を通して、自分の価値観を深め、民主的でよりよい社会を築いていこうとする主権者意識を持った生徒を育てることが大切だと考える。

本年度の研究(歴史的分野)では、まず、その時代に生きた人々の生き方を具体的にとらえることができるようにする。そして、その生き様から学んだり共感したりできるようにし、その時代を生きた人々の思いに迫ることができるようにしていきたい。

(3) 研究の仮説

生徒が問題意識をもって課題追究に取り組めるようにしていけば、社会事象に主体的に関わり、事実を実感的にとらえることができるようになるであろう。

個人追究でわかったことをもとにした話し合い活動の場を設定すれば、社会事象を多面的にとらえられるようになり、新たな認識を構築できるようになるであろう。

その時代の代表的な人の生き方を丹念に追究していけば、この人の生き方に学んだり共感したりできるようになり、自分の価値観を高めることができるであろう。

(4) 研究の方法

問題を身近にする...追究を深めていくためには、生徒の関心・意欲を高める必要がある。そこで、本実践では、生徒になじみのある「西郷隆盛」と「大久保利通」を取り上げその生き様を追究させることで、問題を身近にし、意欲的に追究に取り組めるようにする。

生徒の問題意識が連続する単元構想を考える...生徒の追究を深めていくために、常に生徒の問題意識がどこにあるのかを把握し、その問題意識を核にして学習を進めるようにする。特に、生徒から出た「どうして?」「なぜ?」といった「?」を大切にし、その疑問を生かした追究課題を設定する。

話し合いの場を工夫する...社会事象を多面的にとらえられるようにするためには、個人追究を深めるだけでなく、他の友達の追究を知り、新たな視点から自分の考えを見直すことが大切である。そこで、本単元では、「明治6年の政変」と「単元のまとめ」の場面で話し合いの場を設ける。

ワークシートを活用する...ワークシート(教師自作プリント)には「学習のねらいを明確にすることができる」「書くことによって思考を確かなものにするができる」「学習したことにつ

いて自己評価をさせることができる」「生徒の変容を追跡できる」などの役割があると考え、単元を通して活用していく。

3 授業の実践 2年歴史的分野「時代を切り拓いた人々 西郷と大久保」(11時間扱い)

(1) 単元の目標

西郷隆盛と大久保利通の生き方に関心を持って調べ、志を持って生きることのすばらしさを感じ、自分の生き方を見つめることができる。

西郷隆盛と大久保利通の生き様について、文献資料やインターネット資料を活用して個人追究し、わかったことを工夫してワークシートにまとめることができる。

個人追究で分かったことをもとに話し合い活動に積極的に参加し、西郷隆盛と大久保利通の生き方について認識を深めることができる。

西郷隆盛と大久保利通の生き様を調べる活動を通して、倒幕から西南戦争までの世の中の様子について理解することができる。

(2) 授業の実際

西郷と大久保ってどんな人？

生徒たちにとって西郷と大久保は歴史上の人物の中ではなじみがある人物である。特に西郷については顔写真を提示すると即座に「西郷隆盛」と答えた。大久保については若干反応が鈍かったが、名前を紹介すると「聞いたことがある」という声が挙がった。さらにこの二人について知っていることを聞くと「幕府を倒した」「西南戦争で死んだ」などが出てきた。生徒は二人のことを断片的には知っていることが分かった。

この断片的な知識を整理するために、まず、二人の生い立ちと二人の関係が分かる資料の読み取りを行った。その後、「二人の人物について分かったこと」「これからもっと調べたいこと」をワークシートにまとめた。

第1時において西郷と大久保の性格を大まかにつかむことができた。それと同時に二人に関心を持ち、その生き様をもっと知りたいと思うようになった。この関心の高まりを大切に、その後の追究意欲の持続を図っていくことにした。

西郷と大久保が倒幕から廃藩置県までどのように関わったかまとめよう。

西郷と大久保について興味をもった生徒たちは「二人が何をやったのかを詳しく知りたい」と言い出した。そこで倒幕から廃藩置県までの略年表作りを行い、西郷と大久保がどの出来事に深く関わっていたのかを明らかにした。(教室掲示用の年表にも二人の活躍を確認できるようにした。)

次に倒幕から廃藩置県までの大まかな様子を捉えられるように、ビデオ『日本の歴史 15』を視聴した。このビデオ視聴を通して、王政復古の号令、戊辰戦争、廃藩置県などにおける二人の言動をつかんでいった。

さらに、『日本史新聞』など生徒が読み取りやすい資料を利用し、西郷が長州の征伐と薩長同盟に、大久保が薩長同盟や王政復古の号令に深く関わったことなどを読み取った。

- 西郷と大久保は下級武士であったにもかかわらずどんどんと力を上げていくところがすごいと思った。西郷の性格がとても好きです。(生徒A)
- 西郷は気に入らない人には、けんかをうるタイプ。大久保はいろいろな人と付き合って自分を守るタイプ。この二人がどうやって協力して幕府を倒したのか疑問です。(生徒B)
- 碁を打って殿様に近づいたのは非常に頭がよい。友達に選ぶならば大久保にする。(生徒C)
- 西郷隆盛はとても忠実な人だと思う。それにすごい努力をしていると思った。大久保はすごい頭がよくて西郷と比べると大久保のほうが頼れそうな感じ。私はこの二人がこんなにも考えが違うのになぜ、幕府を倒すことができたのか少し気になった。(生徒D)

抽出生徒 A・B・D の感想を見ると、そろって、二人が協力し合って改革を行ったという点に触れている(文中下線部)。性格に違いはあるものの、同郷で幼馴染みであるという点、ともに日本を良く

していきたいと願っていた点に気づいていた。また、前時では大久保を高く評価していた生徒 D は、西郷が江戸城総攻撃を中止した点や

戊辰戦争時の発言などから西郷を評価し直している。前時で二人が協力し合っていた点に気づいた生徒たちに、二人が政府軍対反乱軍に分かれて激しく戦った事実を提示した。生徒たちの中に「なぜ仲のよかった二人が戦ったのか」という疑問がわいてきたので西南戦争について調べることにした。

調べの支援として、映画『田原坂』の視聴を行った。西南戦争の様子を知ること、この戦争の激しさを感じ取ることができた。また資料集の読み取りで、不平士族が全国に多くなってきたことも知ることができた。

生徒の感想を見ると西郷を評価しているものが多い。第1時に大久保を高く評価した生徒 D は西郷を支持するようになった。その一方で戦争が起きてきた本当の背景は何かという疑問も挙がってきた。

また、西南戦争に至るまでの経緯をもう少し詳しく知りたいという声も出てきた。そこで次時は二人の考えが対立して争うようになった原因を追究することにした。

西郷と大久保が争った西南戦争ってどんな戦争？

前時で二人が協力し合っていた点に気づいた生徒たちに、二人が政府軍対反乱軍に分かれて激しく戦った事実を提示した。生徒たちの中に「なぜ仲のよかった二人が戦ったのか」という疑問がわいてきたので西南戦争について調べることにした。

調べの支援として、映画『田原坂』の視聴を行った。西南戦争の様子を知ること、この戦争の激しさを感じ取ることができた。また資料集の読み取りで、不平士族が全国に多くなってきたことも知ることができた。

生徒の感想を見ると西郷を評価しているものが多い。第1時に大久保を高く評価した生徒 D は西郷

- 西郷さんと大久保さんは二人が協力し合っていると思った。西郷さんは人々のためを思って戦いをやめさせたと思った。西郷さんはたよれる人だということも分かった。(生徒 A)
- 西郷の一言ですべての行動が中止になったり、急に行動を起こしたりしている。思いたったらすぐ行動におこすのが西郷、それを助けるのが大久保だと思った。(生徒 B)
- 西郷と大久保は明治初期の改革でいろんな人を説得して大変だったと思った。二人以外の木戸孝允なんかもいろんな努力をしたので、版籍奉還と、廃藩置県などの御一新にたどり着いたのだと思った。(生徒 C)
- 西郷は**ずばずばした発言が目立つ**。勝の話聞いて江戸城を攻撃しないことは正解だと思った。戊辰戦争での西郷の**勇氣ある行動が光った**。(中略)廃藩置県の問題はとて難しいと思う。武士が怒るのも別におかしいわけではないし、大久保たちの考えも間違っていないと思う。この状況で廃藩置県を成功させることができたのは、大久保や西郷などの協力のおかげかと思う。この人たちは**本当に苦労したのだな**あと思った。(生徒 D)

- 西南戦争を起こすのがいやなのに、士族の声に押されて戦うことを認めたので西郷はえらい人だなあと思った。(生徒 A)
- 西郷はこの戦いに勝てると思って戦ったのかなあ(生徒 B)
- 大久保は西郷にとっては**気の毒**といっているが本当にそれでよかったらうか疑問だった。なぜ西郷を暗殺してまで戦争を始めたのだろうか。(生徒 C)
- (政府が)西郷を暗殺しようとして戦争が始まったことは知らなかった。士族が西郷を守ろうとしていたのは西郷が慕われていたわけだなあと思った。(生徒 D)

を支持するようになった。その一方で戦争が起きてきた本当の背景は何かという疑問も挙がってきた。また、西南戦争に至るまでの経緯をもう少し詳しく知りたいという声も出てきた。そこで次時は二人の考えが対立して争うようになった原因を追究することにした。

大久保が同行した遣欧使節団の様子と西郷が中心だった留守政府側の様子を調べよう。

西南戦争が起きた遠因に、西郷と大久保が明治6年に争ったことが挙げられる。このとき留守政府の中心であった西郷は外交重視政策を主張し、西洋を視察した大久保の主張する内政重視政策と対立が起きた。そこで、廃藩置県から明治6年の政変に至るまでの西郷・大久保それぞれの活躍ぶりを調べ、対立の原因と二人の考え方の違いについて個人追究を通じて明らかにすることにした。

個人追究は、留守政府の西郷について調べたい生徒と西洋視察の大久保について調べたい生徒とに分かれて個人追究をすることにした。

西郷と大久保、

どちらの人物を選ぶかは生徒の関心の高さに任せるところ、2：1で西郷が多かった。

生徒Dは西郷を支持し、個人追究していた。生徒A,Bも西郷を個人追究するようになった。大久保については生徒Cが個人追究している。

西郷については、図書資料やインタ

ーネット資料を中心に学制や徴兵令、地租改正、朝鮮半島情勢についての追究していった。一方、大久保については、ビデオ視聴やインターネット資料でアメリカとの条約改正失敗、イギリスの工業の様子、ドイツのビスマルクとの出会いを中心に追究していった。

そして、個人追究後に話し合いを行った。個人追究で分かったことを発表し合うことで、西郷の内政重視と朝鮮半島情勢への対処の仕方、大久保の殖産興業、富国強兵策の考えを理解できた。この話し合いによって、

西郷と大久保両方の活動について共通認識をもつことができた。

生徒Aは、ここでは西郷の政策について追究した結果、西郷の人となりを再認識した上で、自分の「手本」であるとまで言

- 『西郷はただの飾り』という本があったけれどそれは間違いとしました。留守中にすごくいっぱいのことをやってのけたというのはすごいと思った。この人は私のお手本です。(生徒A)
- いろいろな改革があったけれど地租改正がすごいと思った。岩倉使節団が帰ってくる前に国家の財政を安定させようと努力していたところ、それに対して結果がよいものとなって目的どおりになっているのがすばらしいと思った。(生徒B)
- 外国の文化政策を学ぶことはすばらしい。工業と軍事の近代化に成功し、(のちに)最強国のひとつに日本が数えられるようになり、大久保の判断は間違いではなかったと思う。(生徒C)
- 西郷の行った改革は大久保たちとの約束を破ったとはいえ、すべて人のためになったといえると思う。改革ばかりなのですばらしい人だと思った。大久保たちは約束を破られていやだと思うけれど他の人たちは感謝した人もいると思う。えらい。(生徒D)

- 大久保が、すごくにくかった。西郷さんにはもう少し長く政治をしてほしかったなあと考えた。自分で言いたいことがいろいろあったのだからなあ。後悔が残ってしまう退職だったと思った。(生徒A)
- ちゃんとした考えがあって朝鮮へ行こうと決めていた。話し合いで負けたのは悔しいのはわかるけれど、それくらいで鹿児島に帰らないでほしかった。(生徒B)
- もしかしたら、大久保はとても悪い人ではないかという気がしてきた。自分が政界に出てトップになりたいからといって、勝手に話を変えることはいけないことだと思う。(生徒C)
- 西郷は大久保にお願いをしてもう一度政府に戻してもらったほうがいい。他にいた西郷を慕っている人はどうなるのか。大久保は西郷を戻したほうがいい。このままでは今よりもっと悪いほうになってしまう(生徒D)

っている。自分の生活に照らし合わせ、自分には足りない部分を意識できた点で、非常に強く共感できたものと思われる。

また、生徒B・Dは、留守政府として西郷が改革を断行したことを高く評価している。生徒Cは、大久保の視察には、世界情勢から見て、日本を近代国家として再生させていくためには国を富ませる必要性があり、その結果、最強国の仲間入りをしたという観点が盛り込まれているものと思われる。

二人の思惑が、外交重視（西郷）と内政重視（大久保）とに分かれている。この違いを次時で理解させたいと考え、二人の対立に焦点を当てることにした。

明治6年の政変時で西郷と大久保はなぜ対立したのだろうか。

意見の違いをより具体的に捉えさせたいと考え、本時は劇化を試みた。インターネットにあった明治6年の政変時の台詞を提示し、代表者数名が西郷隆盛、大久保利通、三條実美などに分かれて劇を行った。

生徒の劇に熱が入り、西郷役が怒って机をたたくなど熱演する場面も見られた。その後、西郷が下野し、鹿児島出身の人間が西郷と同行していく姿を映画『田原坂』を部分視聴して捉えた。

次に、「この明治6年の政変における西郷、大久保の主張はどちらが正しいと感じたか」と問いかけると、生徒は西郷派と大久保派に分かれて強く主張し合った。

大久保を支持してきた生徒Cは、大久保の意外な一面を知ることによって、西郷を支持する側に変わった。彼の中で、葛藤が見られたものと考えられる。また、生徒Aは、これまで西郷を支持してきたが、本時の学習を通して、さらに西郷の魅力を強く感じるようになったものと思われる。

そんな中で、生徒Dは両者それぞれの立場を踏まえた発言をしている。「大久保は、西郷という同郷の偉人に対する処遇を考え直すべきであり、西郷自身もそれを依頼するべきである」と教えている。明治という新しい時代に、二人の協力体制が再び必要であると感じたのではある。

西郷と大久保どちらが政治家としてふさわしいか考えよう。

生徒が西郷・大久保それぞれの生き様に対してより深く共感してきたこの段階で、「西郷と大久保のどちらが政治家としてふさわしいか考えよう」という課題を投げかけた。二人の活動を改めて見つめ直すことによって、この激動の時代を振り返るとともに、二人の生き方を自分自身の生き方に反映させることを狙いである。

まず政治家としてふさわしい人柄とはどんなものかを生徒自身に考えさせた。そして、右のような項目が挙がった。この項目を受けて、生徒は課題に対する自分の考えをまとめようとこれまでの学習を見直した。

そして、政治家として二人

- 今の政治家にはない本当に日本を想う気持ちが言葉に態度になって表れて「熱い気持ちをもっているなあ」と思った。西郷も日本の為に尽くしたところが日本を動かしたんだと思う。身分の高い人から低いまでみなに信頼されて歴史にのれたと思う。(生徒A)
- 今の政治家たちも日本のことを考えているけれど賄賂政治など汚いことを行ってしまう政治家も多いです。そのところ、西郷と大久保という私利私欲のない政治家を見習うべきだと思います。人への公平さ、思いやりも一つも欠けていなかった政治家という点で、とてもすごいと思いました。(生徒B)
- 欧米を視察したときに大久保がやろうとした産業を取りいれようとしたことで日本は世界に冠たる工業国になれたから大久保のおかげで今の日本があると思う。西郷は先のことを考え、行動するのはよかったが西南戦争になってしまうことを考えればよかったと思う。親友だった大久保がまさか攻撃してくるとは思わなかったから分からなかったのだと思う。この二人の人物はかなり日本を変えたと思った。(生徒C)
- 西郷と大久保のいいところと悪いところを出し合って助け合えばもっといい政治ができると思う。今日の授業で私はどちらが政治家に向いているのかははっきりいえなくなった。(生徒D)

を評価したことを発表し合った。授業の前半では、生徒 A をはじめとして西郷を支持する生徒が発表した。C1のように西郷の下野を批判する大久保支持派の生徒から意見が出てくると、生徒 B のように西郷支持派からの反対意見も出てきて話し合いが深まっていった。(右の授業記録参照)

これまで、感情的に感想を書いていた生徒 A・B は、次ページの授業感想にあるように、「政治家としてふさわしい」という課題の投げかけによって、現代社会における政治のあり方と明治初期の政治家を代表する二人の比較という、より視野の広がった感想を持つことができるようになった。特に生徒 A では、公正無私で国を憂う心が大切であるという思いを読み取ることができる。

また、生徒 C は歴史的事実から、現代日本の豊かさの基礎を築き上げた点に触れ、感謝すら覚えている。さらに、同郷の二人が戦わざるを得なくなった点を意識できている。

大久保と西郷との間を揺れ動いていた生徒 D にいたっては、政治家として、どちらか一人を選ぶということの難しさを痛感している。どちらも、明治政府にとって、欠くことのできない人物であった点を鑑みているものと思われる。一人でもいなかったとしたら、明治新政府は成立し得なかったし、現在の日本にもつながることがなかった。両者が協力できたからこそ近代日本の誕生があった。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 「学ぶ喜びを分かち合う」について

- ・授業中に出てきた生徒の疑問やワークシートに書かれていた感想を大切にしつつ、教師のねらいと融合させながら学習課題を設定していったことで、生徒の追究意欲が高まってきた。学習が進むにつれて主体的に追究に取り組むようになってきており、学ぶ喜びを感じていたと考えられる。
- ・第6・7時で、遣欧使節団と留守政府の様子を個人追究し、それをもとに第8時で明治6年の政変について話し合いを行った。話し合いによって西郷と大久保の両者の立場から社会事象を見つめるようになり、社会事象を多面的にとらえられるようになった。また、第10・11時に行った「西郷と大久保のどちらが政治家としてふさわしいか」についての話し合いによって、現在の政治と対比しながら事象を見つめる生徒も出てきており、認識の深まりが見られた。このような生徒の姿から、学ぶ喜びを分かち合うためには学びの共有化が大切であることが確認できた。

(2) 「共生のあり方を問う」について

- ・西郷と大久保の二人の生き方を丹念に追究していくことで、問題を身近に感じられるようにし、二人の生き方から学んだり共感したりすることによって自分の生活を見直していけるようにしたいと考えた。生徒たちは、学習が進むにつれて、自然と西郷派と大久保派に分かれ、自分の支持する人の生き方に関心をもって追究を進めていた。また話し合いによって、自分が支持していなかった人のよさにも気づいていった。第11時の授業後の感想には、二人の生き方をもとにして現在の政治にまで思いを馳せている姿が見られた。これは、二人の生き方に強く共感できた現れだと考える。
- ・第7時の授業感想に「(西郷は)自分の手本です。」と書いていた生徒がいた。感想には書かなくても、このように自分の生き方と対比しながら追究を進めていた生徒もいた。このことから、本単元の学習が、生徒の生き方に影響を与えたことがうかがえた。

(3) 今後の課題

- ・本実践では、歴史的分野における共生のあり方を中心に据えて実践を進めてきた。歴史上の人物の生き方に共感する姿は見られるようになったが、果たして「共生」するに至ったかという点とは言いえない状態であった。確かに、言葉の上では自分の生活を見直そうとする動きはあったが、ここで学習したことを生活どのように生かしていけばよいかということまで考える生徒は出てこなかった。今後も、歴史学習における共生のあり方については研究を深めていく必要がある。